

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01204

研究課題名（和文）セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張

研究課題名（英文）The development of women's religious authority in the Niassene Tijaniyya, Senegal

研究代表者

盛 恵子 (Mori, Keiko)

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・特任研究員

研究者番号：30566998

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：セネガルのニアセンは、スーフィー教団であるティジャーニー教団の分派であり、そこには女性指導者がいる。ニアセンの創始者イブラヒマ・ニアスは、神の前では男女の区別は存在しないと考へ、また女性に女性を指導させることによって男女の隔離を厳格にするために、女性に指導者となる免許を与えた。ニアスの娘たちは指導者として海外に赴いて現地の女性の間々にニアセンを広め、教団の拡大に大きく貢献した。

首都ダカールでは都市化と移民の増加に伴って、2000年頃からニアスの娘ではない女性指導者たちの活動が目立つ。男女の隔離が行われない現代のダカールで、彼女たちは各自が100人を越える男女の弟子を持ち、名声を享受する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本には、イスラームは女性を男性に対して劣位に置き、女性に対して指導権、特に宗教的指導権を認めない抑圧的な宗教であるという通念がある。本研究の成果は、この通念を覆した。イスラームは、ジェンダーの完全平等を目指す西洋的なフェミニズムとは異なる仕方で、女性の尊厳と宗教的自立性を主張する宗教であることを、ニアセンの女性指導者たちの事例は示した。現実のイスラーム世界には、イスラームの名によって女性を蔑視し抑圧するムスリム諸集団が存在するが、ニアセンの立場では、それはこれらの集団のイスラーム理解の不足に由来する。本研究の成果は、欧米のオリエンタリズムの価値観を離れたイスラーム理解のための資料となる。

研究成果の概要（英文）：The Niassene brotherhood, a branch of the Tijaniyya Islamic Sufi Order in Senegal, has, unlike other Senegalese muslims, women leaders (muqaddama) in its members. Ibrahim Niasse, its founder, thinking that it's true strict separation of men and women is necessary, but there's no distinction of sex in front of god's eyes, gave leader's licence to some women expecting that they can easily teach other women. Some of Niasse's daughters went to foreign countries and taught the doctrines of the Niassene to women there. So they greatly contributed to the expansion of the branch.

In Dakar, the capital of Senegal, where there is no conspicuous gender segregation with urbanization and increasing immigrants, many women Niassene leaders who are not Niasse's daughters, and who have on average more than 100 disciples of both sexes, have come to take an active part since 2000 or so and enjoy a high reputation.

研究分野：セネガルと西アフリカのイスラーム、文化人類学

キーワード：ニアセン セネガルのイスラーム神秘主義教団 男性を指導する女性指導者muqaddama 首都ダカールへの移民の増加 イブラヒマ・ニアスとスーフィー教団 女性の地位向上 サールム地方のカオラック 男性指導者muqaddamの不足

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

イスラーム世界において女性は男性に対して社会的に劣位であり、宗教的には周縁的であるという通念が存在する。この通念を否定しようとする意図する研究、特にスーフィー教団についての研究には、いくつか例を挙げれば、女性はジェンダーによる差別を表面的には受容するが、象徴的な方法で男性優位の体制を批判し相対化する手段を持っている(Andezian 1997)、女性は公的な活動をしないが、神の恩寵であるパラカを得るために、スーフィー教団を積極的に利用する(Coulon 1988)、教団の権威者を後ろ盾にして、イスラーム的魔術の術者として authority の獲得に成功した女性たちが存在する(Gemmeke 2009)といったものがある。しかし、イスラームの非公式な領域で女性がいかに能動的・活動的であったとしても、公的な領域への女性の参加が許されない限り、女性の地位は周縁的でありつづけるといわざるを得ない。ここにおいて、ティジャーニー教団の分派のひとつであるティジャーニーヤ・イブラヒミーヤ(al-Tijāniyya al-Ibrāhīmiyya)、通称ニアセン(Niassène)は、女性に宗教的権威を認めるスーフィー教団として、注目に値する。ニアセンはイブラヒマ・ニアス(1900-1975)によってセネガルの商都カオラックで創始され、世界に1億人の信徒を持つといわれる。ニアスは、すべての信徒は彼が案出したところの霊的修行タルビヤ(tarbiya)を通じて、神の認識を得るべきだとした。なぜなら神がどのような存在なのかを知ることによって、信徒はイスラームの信仰の土台であるところの神の唯一性(tawhīd)を確信することができるからである[Seesemann 2011, 盛 2014]。セネガルのニアセンでは、弟子にこのタルビヤを与える指導者には、男性指導者(muqaddam)だけでなく女性指導者(muqaddama)が存在する。彼女たちはスーフィー(イスラーム神秘主義者)の師として、男女両性の弟子を持ち、尊敬を得ている。彼女たちは男性優位のセネガルのジェンダー役割体制の中で、妻・母という「伝統的」役割を果たしつつ、教団の信仰の根幹に関わる役割を担う。ニアセン教団の女性指導者は、アラブ・ムスリム世界のフェミニストがその復権を希求するところの女性の宗教的権威を体現した、ひとつのロール・モデルといえるのではないかと考えたのが、私がこの研究を開始した背景である。

## 2. 研究の目的

人は誰でもタルビヤによって神を認識し得る、という主張がイブラヒマ・ニアスの思想の核である。女性指導者たちは、タルビヤを与えることを通じて弟子の宗教的実践の最重要の部分の指導を担うので、真にイスラーム的な authority を持つといえる。スーフィー教団において一度結ばれた師弟関係は絶対的であり、弟子は終生師に服従し、奉仕すべきとされる。男性信徒が女性指導者の弟子となった場合、男性が恒常的に女性に服従するという、セネガルのムスリム社会では異例の事態が生じる。セネガルでは人口の95%をムスリムが占めるが、ニアセン以外のセネガルのスーフィー教団、すなわちティジャーニー教団の別の分派であるティジャーニーヤ・マリキーヤ、ムリッド教団、そしてライエン教団では、女性が宗教的リーダーシップを取ることは許されないとされ、これらの教団はニアセンにおけるムカッダマの存在を批難する。イブラヒマ・ニアスは生前、自分の娘たちにムカッダマとなる免許を与えた。彼はまた、娘ではない女性たちにも免許を与えたが、娘ではない女性たちはそれを行ってしなかった。彼の死後、1990年代後半から2000年頃になって始めて、特に首都ダカールで、ニアスの娘ではないムカッダマたちが活発に活動し、大勢の弟子を持つようになった。他教団からの批判が予想されるにもかかわらず、イブラヒマ・ニアスが、そして彼の死後は彼の子孫集団から成る教団幹部が、女性に免許を与える思想的背景は何か?その社会的背景は何か?女性指導者たちは、彼女たちの弟子を含めて人々のジェンダー役割に対する意識を変化させ、セネガル社会において宗教の領域への女性の進出を促進させるロール・モデルとなり得るのか?このような問題の解明が、本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

カオラックとダカールで現地調査を行った。イブラヒマ・ニアスの子孫たち、イブラヒマ・ニアスの時代を知る高齢のムカッダマたちから話を聞き、またムカッダマとして活躍したイブラヒマの2人の娘たちについて調査を行った。また首都ダカールで、ニアスの娘ではない6人のムカッダマたちとその弟子たちの活動を調査した。

## 4. 研究成果

### (1) ニアセンのムカッダマ/ムカッダマ

イブラヒマ・ニアスは自分の弟子の中から、ムカッダマ/ムカッダマの適格者を選んで免許を与えた。彼らはさらに自分の弟子の中から適格者を選んで免許を与え、これが繰り返されて現在に到る。ムカッダマ/ムカッダマは希望者をニアセンに加入させ、彼らにタルビヤを与える。ムカッダマ/ムカッダマには、自分からなりたいたいと言ってなれるものではない。師が、イスラーム一般とイブラヒマ・ニアスの教えを熟知し、また人柄が良く熱心であり、弟子を指導するにふさわしいと認めた人物に、免許を与える。現在は、アラビア語の能力は必須ではない。ムカ

ムカッダマ/ムカッダマは、弟子が正しくイスラームを實踐できるよう指導する役割を負うので、必ずしも学者である必要はない。しかし、イブラヒマ・ニアスの息子たちや娘たちであるムカッダマ/ムカッダマはすべて、アラビア語の能力を身につけている。ムカッダマ/ムカッダマの活動は職業ではなく、神に対する奉仕として行われる。したがって弟子に対する指導は、直接的には収入に結びつかない。また、免許を与えられた人々の全員がムカッダマ/ムカッダマとして弟子を指導するわけではなく、免許をただ持っているだけで指導をしない人々がいる。

## (2)なぜイブラヒマ・ニアスは女性に宗教的リーダーシップを与えたか

### 思想的な理由

女性が宗教的権威を持つことができる理由は、イスラームには「外的な・明らかな」(zāhir)次元と「内的な・見えない」(bāṭin)次元があり、内的な次元においては性別は存在しないからである。イブラヒマ・ニアスはこのことを、彼の母語であるウォロフ語で、「*Góor ay góor la, jigéen ay góor la.* (男は男であり、女は男である)」と表現した。しかし、「内的な」次元において男女の区別がないことは、タルビヤを受けて神を知った者にしか、理解することができない。神を知ると、身体には男女の区別があるが、魂(rūh)には区別がないということがわかる。この説明は、スーフイズムの枠組みに依拠した説明である。しかし、イブラヒマ・ニアスの息子であるマーヒ・ニアスは、スーフイズムの枠組みに依らない説明をした。彼によれば、男女の間に優劣はなく、男女は相補的である。イスラームにおいては、政治と軍隊の指導者は大部分が男性であり、イマームには男性だけができる。家族を指揮・監督するのも男性である。しかしこれは女性の劣位や女性差別を意味するのではなく、社会において男女が共生し、ともにイスラームを實踐するための組織化の問題に過ぎない。預言者ムハンマドは人々に、彼の妻のひとりであるアーイシャから信仰を学べと言った。彼のこの発言は、女性が人々の師となることができることを示す。セネガルの他教団の指導者たちは、女性が宗教指導者になれないと主張するが、それは彼らがイスラームを十分に理解していないからである。

### 実際の理由

ムカッダマであったイブラヒマ・ニアスの娘の、孫にあたる女性によれば、イブラヒマが女性に免許を与えた理由は、女性に女性を指導させることによって、男女の隔離をより厳格に行おうとしたからである。彼はムカッダマを、専ら女性を指導するものと想定していた。しかし彼の死後に出現したムカッダマたちは、女性のみを指導するのではなく、男女両性を指導する。

## (3)ムカッダマは、既存のムスリム社会における男性の権威を受け入れる

ムカッダマは、イスラームの「内的な・見えない」(bāṭin)次元においては、ムカッダマと全く等しい権威を持つ。しかし「外的な・明らかな」(zāhir)次元においては、彼女は男性の指揮権を尊重する。家庭では、彼女は妻、母の役割を果たし、夫に従う。またニアセンにおける集団的な儀礼、たとえばワズイーファ(wazīfa)やハドゥラトゥル・ジュマー(haḍratul-jum‘a)においても、ムカッダマは彼女の弟子たちの集団の前に立つことはなく、彼女の男性の弟子たちの後ろに、彼女の女性の弟子たちとともに座る。したがって、一見すると男性がこれらの儀礼を指揮しているように見えるが、しかし内的な次元においては、ムカッダマは彼女が持つ霊的な権威によって、これらの儀礼を司宰する(盛 2020)。

## (4)イブラヒマ・ニアスの娘であるムカッダマ

イブラヒマ・ニアスは自分の年長の娘たちのいくらかを、ムカッダマに指名した。ムカッダマとして最も有名な娘たちは、彼の長女であるファトゥマタ・ザーラ・ニアス、ロッハヤ・ニアス、そしてマリヤム・ニアスである。彼女たちはイスラーム学者でもあり、銘々がコーラン学校を開いて子供たちを教え、アラビア語で著述した者もいる。イブラヒマの孫にあたるアサン・スイセによれば、イブラヒマは「女性は知識において男性と競争すべきだ」と述べた[Cissé 2015: 207]。ムカッダマである娘たちは、ニアセンの海外への拡大のために大きな貢献をした。イブラヒマは娘たちを、彼が行ったガーナやナイジェリアへの布教の旅に連れて行き、現地の女性たちがイスラームへの改宗、さらにニアセンへの加入を希望して彼のもとに来ると、娘たちにそれを担当させた。これらの国々では男女の隔離が厳格であり、女性がニアセンへの加入を希望しても、彼女は父あるいは夫の同伴がなければ、ムカッダマのもとでニアセンに加入することができない。この問題は、女性がムカッダマのもとで加入すれば解消される。

## (5)ダカール市のムカッダマたち

2000 年前後から、ダカール市(la ville de Dakar)において、イブラヒマ・ニアスの娘ではないムカッダマたちの活動が目立つようになった。私は6人のムカッダマたちを調査した。彼女たちは2023年現在、40代後半から70代である。彼女たちは各自が100人以上の男女の弟子を持ち、海外に住む弟子たちの招きに応じて、フランス、スペイン、合衆国などに行くこともある。彼女たちは皆、ニアセンの有名な指導者たち、すなわちイブラヒマ・ニアスの息子たち、イブラヒマの最も有名な弟子たちから免許を与えられた。このことは、彼女たちがニアセンにおいて周縁的・例外的な存在であるどころか、その反対であることを意味する。ダカール市の本来の住民はレブーという漁民だが、彼女たちは移民である。そして彼女たちの弟子もまた、移民の第2世代以降の人々であり、若い学生と勤労者が占める割合が大きいことが注目される。

ニアセンの本拠地であるカオラックでは、ダカールには大勢のムカッダマたちがいるが、ダカールは特別である、ここサルム地方にはムカッダムが大勢いるので、女性は免許を与えられてもそれを持っているだけで、ムカッダマとして弟子を指導することは稀だと説明された。したがって、ダカールではなぜ免許を得た女性が実際に指導をするのかを明らかにするために、ダカール市ワカム行政区(Commune de Oukam)に住む A. スィセというムカッダマの事例を挙げる。

## (5)ダカール市ワカム行政区に住むムカッダマ、A. スィセの事例

### ワカムの概要

ワカム行政区は人口 74,692 人(2013)、面積 7.45 km<sup>2</sup>である。植民地以前のワカムは、5 つのレブーの集落からなる村だった。植民地時代にワカムは基地の町となり、現在 4 つの軍事施設がある。またワカムの北のヨフ行政区の、ワカムに隣接した部分には空軍の基地もある。ワカムとヨフには飛行場が建設され、アフリカとヨーロッパ、南北アメリカを結ぶ航空の要衝となった(Whittlesey 1948)。現在ワカムに飛行場はないが、ワカムにはヨフの飛行場で働く人々がいる。2010年に、高さ約50mの「アフリカ再生記念の像 Monument de la renaissance Africaine」が建てられたので、ワカムは観光地としても発展し、多くのホテルやレストランができた。

### ワカムのイスラーム的状况

ワカムには、レブー、ウォロフ、セレール、フルベ、マンディンコ、ジョラなど多様な民族が住む。また、複数のスーフィー教団(ニアセン、ティジャーニーヤ・マリキヤ、ライエン教団、ムリッド教団、カーディリー教団、ファーディリー教団)の信徒たち、そしてサラフィストすなわち、初期の時代のイスラームへの回帰を主張し、すべてのスーフィー教団に反対する人々がいる。それぞれのスーフィー教団は、その本拠地に住む民族から最初の信徒を得た。ニアセンは本来、サルム地方のセレールとウォロフがその主な信徒だった。セネガルの伝統では、息子は父の、妻は夫の教団に所属することになっていた。

スーフィー教団はそれぞれ、ワカムで活発な宗教活動を行う。様々な教団が主催する各種の祭り、説教の集会、宗教歌を歌う集まりなどが、頻繁に行われる。ワカムの移民第1世代は、その出身地と地理的に関係が深い教団に所属している。しかし移民第2世代以降になると、無自覚に親の教団に入るのではなく、自分で宗派を選択するようになる。学校の友人たち、隣人たちなどから情報を得ることによって、彼らは主体的に、しかも早い時期に選択する傾向がある。A. スィセの弟子の中では、13歳で彼女の弟子になった男性がいた。女性も自ら教団を選び、結婚した夫が別の教団の成員であっても、夫の教団に移ることはない。ワカムの青年たちは、兄弟姉妹のなかでも、信奉する宗派が多様化している。銘々が異なる教団に属し、なかにはサラフィストもいるという状況だが、家族の中で宗派の違いによる対立が生じることはない。

### A. スィセについて

A. スィセ(1951-)の民族はマンディンコであり、先祖はガンビアにいた。彼女の父がカオラックの近くの村に働きに来て、彼女はそこで生まれた。彼女の父方は学者の一族であり、カーディリー教団の学者を輩出した。しかし彼女は伝統に従って、結婚に際して夫の教団であるニアセンに加入した。彼女の夫 M. カマラ(1943-)もマンディンコである。彼は非ムスリムの戦士の家系に属し、彼の父がこの家族で最初のイスラーム改宗者だった。この父は仕事を求めてカオラックに来、イブラヒマ・ニアスと出会ってニアセンになった。M. カマラは職業軍人であり、ダカールに配属されてA. スィセとともにワカムに来た。彼は第1妻であるA. スィセの他に、3人の妻を持つ。A. スィセは1990年代に、イブラヒマ・ニアスの息子であるナズィール・ニアスと、ニアスの一番弟子であるアリユー・スィセの息子オマール・スィセから免許を得た。しかし彼女の夫は、この人たちが彼にも免許をくれるというのを断った。自分は軍人だから弟子を指導する時間がない、というのがその理由である。

### A. スィセの活動

A. スィセは弟子たちをニアセンに加入させ、タルビヤを与える。タルビヤには約1ヶ月~2ヶ月を要することが多い。タルビヤの間、弟子は毎日のように彼女の家に来る。彼女は弟子と問答し、弟子が神の認識の体験に到るまで指導する。これに加えて A. スィセの家では、毎日夕方にワズィーフア(wazīfa)という集団的な儀礼が行われる。毎週金曜日には、ハドゥラトゥル・ジュマー(hadratul-jum'a)という宗教歌の集会の後で、彼女が弟子たちに説教を行う。木曜と土曜日の夕方にも、宗教歌の集会が行われる。日曜には、彼女はタルビヤを終わった弟子たちに、サイル(sair)というさらに進んだ修行を指導する。A. スィセは今までに、7人の男性の弟子に免許を与えた。ムカッダム/ムカッダマは、人を正しく導くというたいへん重い責務を負うので、免許を与える際には慎重に人物を選ばなければならないと彼女は言った。

### A. スィセの弟子たち

A. スィセの弟子は約100人であり、フルベ、マンディンコ、セレール、ジョラなど多様な民族からなる若い人たちが、その中心である。彼らは男性も女性も、学生かあるいは勤労者であり、忙しく活動的な日々を送っている。彼らは2003年に、信徒団ダーイラ(daaira)を結成した。ダーイラの団長は男性だが、副団長は女性である。ダーイラは毎月様々な宗教行事を主催し、またカオラックで行われるニアセンの祭りの時には、バスを雇って参加する。A. スィセの弟子たちは、A. スィセに実の息子、娘のように愛されていると感じており、彼女を Yaay(「母」)と呼ぶ。ムカッダムとムカッダマとの間に、指導者としての能力の違いはないと弟子たちは断言する。彼らはまた、女性は家で幼子を教育するので、ムカッダマは弟子を宗教的に教育する

ことにも長けていると語る。さらに、ムカッダムは家族のための労働に忙しくて弟子の指導に十分な時間を割けないが、A. スィセは十分な指導を与えてくれるのでとても良い、とも語った。

ダカール市における、イブラヒマ・ニアスの娘ではないムカッダムたちの台頭の背景

ニアセンの本拠地であるサーラムではなくダカール市で、イブラヒマ・ニアスの娘ではないムカッダムたちが台頭したことの背景として、以下のように考えられる。

イブラヒマ・ニアスが望んだ男女の隔離は、現代のダカール市では行われないので、ムカッダムが男性の弟子を持つことが可能である。またダカール市では若者に宗派選択の自由があるので、ニアセンの本拠地から遠くても、ニアセンへの加入希望者が大勢いる。サーラムにはムカッダムが大勢いるので、この地域の女性は免許を与えられても、実際にムカッダムとして指導することは稀である、とカオラックでは語られた。つまりダカール市では男性の指導者の人数が相対的に不足しているため、指導者の不足を満たすために、女性も指導者になると思われる。また、ニアセンでは信徒の全員がタルビヤを受けるので、ムカッダム/ムカッダマは大勢の弟子の長期間にわたるタルビヤを、密に個人指導しなければならず、指導者としての彼らの活動には多くの時間が必要である。サーラムのムカッダムたちには、職業として商業と農業を兼ねる者が多い。これに対してダカールの男性には給与生活者が多く、彼らには自由な時間が少ないので、免許を与えられてもムカッダムにならない人々が存在する。ダカールでは弟子たちもまた忙しく、学業や労働の暇を縫って指導者のもとに通う。したがって、家族の扶養義務を負わず、相対的に時間の余裕を持つ女性が、周囲から指導を仰がれることが多いのではないかと。

## (7)おわりに

イスラームにおいて男女は本質的に平等であり、社会生活、結婚生活においては男性に指揮権が与えられるが、この指揮権は便宜的であり、男性の優越を意味しない、というニアセンの認識は、ジェンダーの完全な平等を求める欧米のフェミニズムにとって異質である。しかし、ニアセンの指導者のみならず一般のニアセン信徒も、学問においても宗教においても、男性よりも優れた女性はいくらでもいるのだから、女性は当然宗教指導者になることができる、と述べたことから、ニアセンはセネガルのムスリムのジェンダー意識を変えることによって、女性の地位向上に一定の役割を果たしていると評価できる。ニアセン中枢部の権威者たちがダカール市のムカッダムたちに免許を与えたことは、宗教指導者としての女性の活動に対する彼らの期待を示すと考えられる。しかし、ムカッダムがムスリム女性にとってのロール・モデルとなることはあり得ないことも明らかになった。なぜなら、ムカッダム/ムカッダマの地位は職業的なキャリアとは異なって、当人の努力のみによって獲得できるものではないからである。

## (引用文献)

Andezian, S.

(1997) The Role of Sufi Women in an Algerian Pilgrimage Ritual. In Eva Evers Rosander, and David Westerlund (eds.) *African Islam and Islam in Africa: Encounters between Sufis and Islamists*. London, Hurst & Company, pp.193-214.

Cissé, (Shaikh) Hassan Aliyyu

(2015) Shaykh Ibrahim Niass: Revivalist of the Sunnah. In Zachary Wright (ed.) *Pearls from the Flood. Select insight of Shaykh al-Islām Ibrāhīm Niass*. Atlanta: Fayda Books, pp.197-211. (First published in New York: Tariqa Tijaniyya of New York Publications, 1984).

Coulon, C.

(1988) Women, Islam, and Baraka, In Donal B. Cruise O'Brien and Christian Coulon (eds.) *Charisma and Brotherhood in African Islam*. Oxford, Clarendon Press, pp.113-133.

Gemmeke, A.

(2009) Marabout Women in Dakar: Creating Authority in Islamic Knowledge. *Africa*, Vol.79, No.1, pp128-147.

(2016) *Islamic reform in twentieth-century Africa*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Seesemann, Rüdiger

(2011) *The divine flood: Ibrāhīm Niass and the roots of a twentieth-century Sufi revival*. New York: Oxford University Press.

Whittlesey, Derwent

(1948) "Dakar Revisited" *Geographical Review*, Oct., 1948, Vol. 38, pp.626-632

盛恵子

(2014) 「セネガルで成立したティジャーニー教団の分派ニアセンの予備的研究 成立と拡大・タルビヤと境界の超越について」 『スワヒリ& アフリカ研究』 25: 86-105. 大阪大学大学院言語文化研究科スワヒリ語・アフリカ地域文化研究室。

(2020) 「コラム 10 男女の区別は存在しない セネガルのニャセンにおける女性指導者たち」長沢栄治監修、鷹木恵子編著 『越境する社会運動 (イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 2)』 pp.193-195.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 盛恵子
2. 発表標題 「セネガル、ティジャーニーヤ・イブラヒミーヤにおける女性の宗教的権威」
3. 学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 盛恵子
2. 発表標題 「セネガル、ティジャーニーヤ・イブラヒミーヤにおける女性指導者の活動とその背景 ダカール市ワカム行政区の事例」
3. 学会等名 日本アフリカ学会第60回学術大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 鷹木恵子編著 盛恵子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 249
3. 書名 イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 2 越境する社会運動 「男女の区別は存在しない: セネガルのニャセンにおける女性指導者たち」	

1. 著者名 盛恵子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 自費出版	5. 総ページ数 186
3. 書名 セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張 研究成果報告書第3巻 ニアセンの拡大(2) カメルーンにおけるニアセン バムン王国の事例	

1. 著者名 盛恵子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 自費出版	5. 総ページ数 158
3. 書名 セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張 研究成果報告書第2巻分冊1 ニアセンの拡大 (1) その1 モーリタニアにおけるニアセン トラルザ州の事例	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	盛 弘仁  (Mori Hirohito)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------